



Medi-Way 医療通訳者紹介 Vol.27 ポルトガル語担当 濱口さん

◆なぜ医療通訳者になった？

私はブラジルの大学で社会福祉を専攻していたのですが、帰国後は子育てを中心とした生活を送っていました。そんな時、新型コロナウイルスの感染が国内でも報告されはじめ、言葉が通じないことで日本在住の外国人、行政、医療従事者などがとても困っていると知り、自分が誰かのお役に立てるのであればと思って医療通訳に挑戦することを決めました。



◆今まで医療通訳に携わってきて一番嬉しかったことは？

初めて保健所で新型コロナウイルス感染者に聞き取り調査の通訳をさせていただいた時は、既往歴や基礎疾患、症状などたくさんの医療用語が出てきて、絶対に誤訳があってはならないと、とても緊張しました。それでも保健師さんから「通訳さんのおかげで患者さんの主訴がよく理解できた」、「命の危険がある感染者に入院の必要性を理解してもらえたのは通訳さんのおかげ」とのお言葉をいただいた時は本当に嬉しかったです。



◆より良い通訳をするために心掛けていることは？

国籍や文化等にかかわらず、人は病気や怪我からは絶対に逃れることはできません。言葉の壁があることで、必要な治療や公的サービスなどにアクセスできない外国人の方たちの不安を通訳で、少しでも解消できることを望んでいます。そのため、挨拶や笑顔、会話のペースの調整、適切な言葉選びなど、どのようにしたら医療スタッフの方と患者さんがより良い関係を築けるのかと日々模索しながら通訳をするよう心がけています。



『言葉って難しい!』

先日、「ダウン症を持つ子ども」という表現が日本語として正しくないのでは、と話題に上りました。「身につける」、「所有する」という意味の「持つ」を病気に使うのは…という違和感です。それでも、日常会話では、「喘息持ち」や「頭痛持ち」、「痛風持ち」など数え上げたらきりがなく使われていますが、「心疾患を持つ」、「コロナ感染症を持つ」などとは言いません。

外国語ネイティブの通訳者は少し首をかしげて、使い分けの方法を知りたそうでしたが、日本語ネイティブだからと言って、快刀乱麻とはいきません。「本当に言葉って難しいね」とみんなであなづきました。



今月のトピックス

「医療マンガ大賞」



2023年12月に横浜市が主催する「第5回 医療マンガ大賞」の選考結果が発表されました。毎回3つほどのテーマが決められており、テーマごとに「患者家族視点」と「医療従事者視点」で部門賞が選ばれます。

今回のテーマは「自分らしい最期の迎え方」「脳卒中“私”を知るという予防」「SNSとの付き合い方 SNS×医療リテラシー」の3つでした。2021年の第3回には「コロナ禍でのある施設」がテーマに取り上げられたり、その他には脳卒中や大腸がん検診、心房細動の治療、歯科受診のタイミングなど、テーマを見ているだけで現代の医療の様子が見えてくるようです。

もともと難しい医療の話題をマンガで分かりやすく伝えることをコンセプトとして始まった企画のようなので、「慢性期医療」や「看取り」といった表現に気を遣う場面のことでもマンガなら少し受け入れやすいかもしれませんね。医療通訳者としても、この賞の主旨にある「視点を合わせる」ということはとても大切なことだと思っています。患者さんとその家族、医療者の方、それぞれの立場で異なる「医療に対する視点」、またそれぞれの想いは、やはり言葉を介して伝わり、お互いに理解しあえるものだと思います。その時に架け橋になれる通訳者を、私たちは目指しています。

